

### 第三章 藤壺の物語 塗籠事件

[第一段 源氏、再び藤壺に迫る]

内裏に(うちに、中宮は御所に)参りたまはむことは(参内なさる事を)、うひうひしく(大后に氣後れして)、所狭く(ところせく、窮屈に)思しなりて(お思いになって)、春宮を見たてまつりたまはぬを(実子の皇太子に御会い申し上げずに居る事が)、おぼつかなく思ほえたまふ(氣掛かりでいらっしやいました)。

また、頼もしき人もものしたまはねば(中宮の実家の宮筋には頼もしい有力な後見者が無かったので)、ただこの大将の君をぞ、よろづに頼みきこえたまへるに(何かと頼りに申し上げ為さっていらっしやいましたが)、

なほ(今も尚も源氏は)、この憎き御心のやまぬに(面倒なご執心が止まずに)、ともすれば御胸をつぶしたまひつつ(時には胸をお痛めになって)、いささかもけしきを(少しも自分と源氏との不倫の事情を)御覧じ知らずなりにしを(お考えなさらずお知り為さらずに亡くなられた桐壺院を)思ふだに(思うだけでも)、いと恐ろしきに(畏れ多いというのに)、

今さらにまた、さる事の聞こえありて(不倫の噂が立って)、わが身はさるものにて(我が身はともかくも)、春宮の御ためにかならずよからぬこと出で来なむ、と思すに、いと恐ろしければ、御祈りをさへせさせて(祈祷をさせなさって神頼みまで為さって)、このこと(源氏の自分への恋慕を)思ひやませたてまつらむと(思い止めさせ申し為されようと)、思いたらぬことなく(抜かり無く手立て為さって)逃れたまふを(面会を避けて居らしたが)、いかなる折にかありけむ、あさましうて(全く意外な時に)、近づき参りたまへり(源氏は中宮の寝所に近付き為さいました)。

心深くたばかりたまひけむことを(源氏が慎重に仕組んだ事らしく)、知る人なかりければ、夢のやうにぞありける(夢のような事でした)。まねぶべきやうなく(筆舌に尽くし切れないほど)聞こえ続けたまへど(源氏は口説き続けなさいましたが)、宮、いとこよなく(もはや全く)もて離れきこえたまひて(以って受け付けなさらず)、果て果ては、御胸をいたう悩みたまへば(遂には心痛の余り気分を悪く為さって)、近うさぶらひつる命婦(お側に控えていた王命婦)、弁などぞ(乳母子の弁などは)、あさましう見たてまつりあつかふ(驚き呆れて中宮を御介抱申し上げます)。

男は、憂し(悲しい)、つらし(辛い)、と思ひきこえたまふこと(とあって御出でらしく)、限りなきに(深く沈んで居らしたが)、来し方行く先(過去も未来も)、かきくらす心地して(意味が無いように絶望して)、うつし心(正気を)失せにければ(失くしてしまわれたので)、明け果てにけれど(翌朝もすっかり明けたというのに)、出でたまはずなりぬ(三条の宮邸を御出にならずにいらっしやいました)。

御悩みにおどろきて(中宮の体調不良に驚いて)、人びと近う参りて(女房達が母屋の近くに寄って来て)、しげう(頻繁に)まがへば(入り乱れるので)、我にもあらで(源氏は茫然自失の態で)、\*塗籠に押し入れられておはす(人目を恐れた王命婦に隣の納戸に押し込められていらっしやいました)。 \*塗籠(ぬりごめ)は≪寝殿造りで、母屋(おもや)の一部を仕切って周囲を厚く壁で塗り、明かり取りと妻戸を設けた部屋。寝所または納戸として用いた。(大辞泉)≫とある。

御衣ども(おんぞども、源氏の衣服類を)隠し持たる人の心地ども(密かに塗籠に運び入れる女房たちの様子も)、いとむつかし(とても怪訝そうでした)。宮は、ものをいとわびし(全てが情け無い)、と思しけるに(とお思いになり)、御気上がりて(みけあがりて、上気されて)、なほ悩ましうせさせたまふ(更に具合を悪くさせなさいます)。

兵部卿宮、\*大夫(だいふ)など参りて(などの兄宮が遣ってきて)、「僧召せ(祈祷僧を呼べ)」など騒ぐを、大将、いとわびしう聞きおはす(とても情けなくお聞きになります)。\*大夫を<だいふ>と言う場合は、<たいふ>という場合の五位の身分を指すものではなく、「律令制に於ける職(しき)および坊の長官。(大辞泉)」という四位相当の役職名をいう、との事。此処で言う大夫は中宮の兄宮なので中宮職(ちゅうぐうしき、後宮事務職)の長官(カミ)か、春宮の伯父なので春宮坊(とうぐうぼう、皇太子事務職)の長官、あたりなのだろう。

からうして、暮れゆくほどにぞ(やっと夕暮れ近くになって)おこたりたまへる(中宮の具合が治まりました)。かく籠もりゐたまへらむとは(しかし中宮は源氏が塗籠にいらっしやるとは)思しもかけず(思いもかけず)、人びとも(女房たちも)、また御心惑はさじとて(また中宮の御心を惑わせてもと)、かくなむとも申さぬなるべし(そうした事情をお知らせしなかったのです)。

\*昼の御座に(ひるのおましに、東の居間に)みざり出でておはします(中宮は帳台から出て膝を進めて来ていらっしやいます)。 \*読み進めるには当邸の造り、特に母屋の室礼を踏まえる必要がある。寝殿造りは建築様式なので実際の大きさや間取りは各邸毎に異なる。だから読み進めながら手探りで部屋の様子を考えるしかないのだが、それでは映画を見る面白さが味わえない。そこで取り敢えず寝殿の型として「風俗博物館」のWebサイトに紹介されている「五間四面」を平面構成と考えて、同サイトの六条院の室礼を丸ごと仮設させてもらう。「五間四面」では、東西五間(柱間)で南北二間(梁間)の母屋の周囲四面に廂の間が設けられている。すると、その母屋の内の西側2×2間が塗籠で、其処に源氏が押し込められていた、のだろう。あとの東側3×2間が居間だが、其の居間の北西に帳台(ベッド)を置いて中宮が横になっていた、のだろう。人目が邪魔をして源氏と中宮は遠ざけられていたが、実際の距離としては至極近くで一日を過ごしていた、という危うさの臨場感が浮かび上がる。そして居間の北東が昼御座で、後ろに屏風が立ててあった、のだろう。是位で先へ読み進められそうだ。

よろしう思さるる(其の様子にご気分が良くなられた)なめりとて(らしいからと)、宮もまかでたまひなどして(兄宮もお帰りに成られたりして)、御前(おまえ、居間は)人少なになりぬ(人が少なくなりました)。例も(平素から中宮が)け近くならせたまふ人(ごく近くに侍らせる女房は)少なければ(少なかった)、ここかしこの物のうしろなどにぞさぶらふ(ほとんどの女房たちは辺りの屏風や几帳の物陰に居て控えていました)。

命婦の君などは(王命婦は)、「いかにたばかりて(どう誤魔化して)、出だしたてまつらむ(大将を外へお出ししたものだろうか)。今宵さへ(今夜もまた)、御氣上がらせたまはむ(中宮のお目に掛けてお体に障ることがあったら)、いとほしう(申し訳もたちません)」など(などと弁に)、うちささめき扱ふ(耳打ちして持て余している)。

君は、塗籠の\*戸の細めに開きたるを、やをらおし開けて(そっと押し開けて)、御屏風のはさまに伝ひ入りたまひぬ(屏風の後ろを伝って中宮の背後に回り込みました)。\*出入りは枢戸(くくろど、観音開き)よりは引き戸の方が目立たないが、間隙を縫うのは源氏の得意技だから、どちらにしても上手くやったのだろうか。そして塗籠を抜け出た源氏は帳台の後ろを回って、更に屏風の後ろに潜んだ、という訳だ。

めづらしくうれしきにも(源氏は日中に中宮を久しぶりに見た嬉しさで)、涙落ちて見たてまつりたまふ(涙を流してお顔を拝しなさいます)。「なほ(まだ)、いと苦しうこそあれ(ひどく気分が優れません)。世や尽きぬらむ(死んでしまいそうです)」とて(と言って)、外の方を見出だしたまへる(外の方を遠く御覧に成る)かたはら目(中宮の横顔は)、言ひ知らずなまめかしう見ゆ(言葉にならないほど艶めかしく見えました)。

御くだものをだに(お菓子だけでも)、とて参り据ゑたり(と女房が元気の無い中宮の前に果実が台に盛られて出してありました)。箱の蓋などにも(箱の蓋には餅菓子も)、なつかしきさまにてあれど(美味しそうに並べられてありましたが)、見入れたまはず(中宮はお目に留め為さいませんでした)。世の中をいたう思し悩めるけしきにて(世の中をひどく悲観為されたようで)、のどかに眺め入りたまへる(呆然と庭を眺めて御出でで)、いみじうらうたげなり(なんともお劳しい中宮のお姿でした)。

髪ざし(流れる髪質の)、頭つき(生え際や)、御髪のかかりたるさま(肩に掛かる様子は)、限りなき匂はしさなど(まるで匂い立つような麗しさで)、ただ(ちょうど)、かの対の姫君に違ふところなし。年ごろ(この数年)、すこし思ひ忘れたまへりつるを(北山で少女を初めて見た時に中宮に似ていると思った驚きを少し忘れて来ていたが)、「あさましきまでおぼえたまへるかな(呆れるほど良く似ていらっしゃる)」と見たまふままに(と拝しなさりながら)、すこしもの思ひの(中宮は打ち解けてくれないが既に対の君は手中に在ると少しは執着心が)はるけどころある心地したまふ(晴れる様な気に成っていらっしゃいました)。

気高う恥づかしげなるさまなども(上品で慎み深そうな様子も)、さらに(両者に)異人とも(ことびととも、特に違いは)思ひ分きがたきを(見分けられなかったが)、なほ、限りなく昔より思ひしめきこえてし心の思ひなしにや(大将には、やはり幼い時からお慕い申し上げてきた思いの所為か)、「さまことに(中宮は格別に)、いみじうねびまさり(趣き深く年を重ねられて)たまひにけるかな(素晴らしくして御出での様だ)」と、たぐひなくおぼえたまふに(他に代え難くお思いになって)、心惑ひして(お心を惑わし為されて)、やをら(不意に)\*御帳の内に(みちやうのうちに、帳台の中に)かかづらひ入りて(伝って入り込んで)、御衣の袂を(おんぞのつまを、中宮の着物の裾を)引きならしたまふ(引いて立てた衣擦れの音で中宮を誘い為さいました)。\*唐突で大胆な描写だが、場面設定に破綻は無い。

けはひしるく(中宮にも着物を引く人の気配ははっきりと分かり)、さと匂ひたるに(源氏の薫香がさっと匂ったので)、あさましう(驚き)むくつけう思されて(恐ろしくもお思いになって)、やがてひれ伏したまへり(力無くひれ伏してしまわれました)。

「見だに向きたまへかし(顔を上げずとも、せめて此方をお向きください)」と心やましう(と源氏は気ばかり)つらうて(逸って)、引き寄せたまへるに(掴んだ着物を引き寄せなさいましたが)、御衣をすべし置きて(中宮は着物を残して身をすり抜けて)、みざりのきたまふに(後退りなさいましたが)、心にもあらず(意に反して)、御髪を取り添へられたりければ(髪の手まで源氏に掴まれていらしたので)、いと心憂く(本当に情けなく)、宿世のほど(前世の因縁の深さを)、思し知られて(思い知らされて)、いみじ、と思したり(おぞましい事とお思いになりました)。

男も、ここら(長年)世を(世間体から男女の仲を)もてしづめたまふ御心(我慢してきた気持ち)、みな乱れて(抑え切れずに思い乱れて)、うつしぎまにもあらず(在ろう事か)、よろづのことを(思いの丈を)泣く泣く怨みきこえたまへど(切々と訴え為されましたが)、まことに心づきなし、と思して(中宮は本当に節度の無い事とお思いに為って)、いらへも聞こえたまはず(お返事も為さいません)。ただ、

「心地の、いと悩ましきを(気分がとても悪いので)。かからぬ折もあらば(また別の時にも)、聞こえてむ(お話し致します)」とのたまへど(とだけ仰いましたが)、尽きせぬ御心のほどを言ひ続けたまふ(源氏は溢れる思いをお話し続けなさいます)。

さすがに(そうすると中宮もさすがに)、いみじと聞きたまふふしも(胸に染みてお聞きになる事も)まじるらむ(中には在ったのでしょうか)。あらざりしことにはあらねど(確かに以前は犯した情交の過ちだったが)、改めて、いと口惜しう思さるれば(改めて強い後悔の念を中宮は覚えていらしたので)、なつかしきものから(若かった日を懐かしく思いながらも)、いとようのたまひ逃れて(何とか言い逃れて)、今宵も明け行く(昨夜に続いて今夜も源氏の誘いを拒み通したまま明けつつありました)。

せめて(無理強い出来ないが、かといってただ)従ひきこえざらむもかたじけなく(肌を重ねないまま別れるのも忍びなく)、心恥づかしき御けはひなれば(気まずかったので源氏は)、「ただ、かばかりにても(せめて話すだけのこうした形だけで)、時々、いみじき愁へをだに(苦しい胸の内を)、はるけはべりぬべくは(晴らす事が出来るなら)、何のおほけなき心もはべらじ(他に大逸れた事をする気持ちはありません)」など、たゆめきこえたまふべし(場を和ませようとお話しなさいます)。

なのめなることだに、かやうなる仲らひは(普通の男女の間柄でも)、あはれなることも添ふなるを(別れには思いが募るが)、まして、たぐひなげなり(ましてこの事情は例え様もありません)。明け果つれば(夜も明けてしまったので)、二人して(王命婦と弁の二人は)、いみじきことどもを聞こえ(人目に付く危うさを訴え源氏に帰宅を促し申し)、宮は、半ばは亡きやうなる御けしきの心苦しければ(半ば茫然自失気味の労しさなので)、

「世の中にありと聞こし召されむも(私が生きていることを宮の御耳に入れることすら)、いと恥づかしければ(恥ずかしいので)、やがて亡せはべりなむも(もう死んでしまおうかとも思いますが)、また、この世ならぬ(またあの世から思い続けて)罪となりはべりぬべきこと(罪を犯すことに成りそうです)」など聞こえたまふも(などと申しなさるも)、むくつけきまで思し入れり(源氏は気持ちを抑え難い様子で思い詰めていらっしやいました)。

「逢ふことのかたきを今日に限らずは、今幾世をか嘆きつつ経む (和歌 10-16)

「逢いたさ見たさが高じると、死んでも思いが残ります (意識 10-16)

御\*ほだしにもこそ(貴方の往生の妨げにもなり兼ねません)」と聞こえたまへば(と源氏がお詠みになると)、さすがに、うち嘆きたまひて(中宮は嘆息して御答え為さる)、 \*「ほだし」は繋ぎ止める縄で<束縛するもの>をいう。注に《『完訳』は「当時の仏教観では、自分の執着は相手の往生の妨げともなる」と注す。》とある。

「長き世の恨みを人に残しても、かつは心をあだと知らなむ」(和歌 10-17)

「残す思いが死ぬ前に、どう変わるとも知れません」(意識 10-17)

はかなく言ひなさせたまへるさまの(冷たく受け流されて軽くあしらわれた様で)、言ふよしなき心地すれど(源氏は言う甲斐の無い気持ちがしたが)、人の思さむところも(人目もあるし)、わが御ためも苦しければ(自分の立場も悪くなるので)、我にもあらで(気が気でないままで)、出でたまひぬ(御帰りになりました)。

## [第二段 藤壺、出家を決意]

「いづこを面(おもて)にてかは、またも見えたてまつらむ(どの顔をして再びお目に掛かれようか)。いとほしと思し知るばかり(中宮が私を憐れんで下さるのを待つばかりで、それまでは言う言葉は何も無い)」と思して(と源氏はお思いに為って)、御文も聞こえたまはず(後朝のお手紙も差し上げません)。

うち絶えて(其の後はすっかり)、内裏、春宮にも参りたまはず、籠もりおはして、起き臥し(寝ても醒めても)、「いみじかりける人の御心かな(なんと連れないお気持ちだろう)」と、人悪ろく(ひとわるく、身なりも構わず)恋しう悲しきに(悲恋に暮れて)、心魂(こころだましひ)も失せにけるにや(気が抜けたように)、悩ましうさへ思さる(体の具合が悪くなるほど気落ちし為されました)。

もの心細く、「なぞや(どうしてこう)、世に経れば憂さこそまされ(生きていると辛い事ばかりなのだろう)」と(と源氏は)、思し立つには(出家を思い立たれなさるのだが)、この女君の(この二条院の邸にいる対の姫君が)いとらうたげにて(とても愛らしく)、あはれにうち頼みきこえたまへるを(心細げに源氏を頼りにしている事を思うと)、振り捨てむこと(妻を見捨てて仏門に入る事は)、いとかたし(とても出来ないのでした)。

宮も、その名残、例にもおはしませず(中宮も後味が悪く普段通りにはお過ごしになれません)。かうことさらめきて籠もりみ(大将がこの事で明らかに塞ぎ込みなさって)、おとづれたまはぬを(お手紙もお寄越しに為らないのを)、命婦などはいとほしがりきこゆ(王命婦などはとても気まずく申し上げていました)。

宮も、春宮の御ためを思すには(中宮も皇太子の立場を思えば、後見役たる大将と)、「御心置きたまはむこと(心を隔てている事は)、いとほしく(気詰まりで)、世をあぢきなきものに思ひなりたまはば(大将が世を悲観なさって)、ひたみちに思し立つこともや(出家を思い立ちなさっては、皇太子を親身に庇ってくれる人が居なくなる)」と、さすがに苦しい思さるべし(さすがにお悩み為さったようです)。

「かかること絶えずは(かといって大将と面会を重ねては)、いとどしき世に(何でも大袈裟に言う世間が)、憂き名さへ漏り出でなむ(必ず浮き名を言い立てるだろう)。大后の、あるまじきことに(在っては為らぬ事だと)のたまふなる(仰っているという)位をも(くらみをも、故院の後という今の地位さえ)去りなむ(辞退してしまおうか)」と、やうやう思しなる(次第に御考えに為ります)。

院の思しのたまはせしさまの(院が崩御後の東宮や中宮の地位の保全をご配慮下された事が)、なのめならざりしを思し出づるにも(如何に並大抵のものでは無かったかを思い出してみると)、「よろづのこと、ありしにもあらず、変はりゆく世にこそあめれ(全てが御存命中とは違って、変わり行くご時世では在る事だろうか)。

\*戚夫人(せきふじん、漢の高祖の夫人)の見けむ目のやうにあらずとも(が遭った目のやうに継母に皇太子母子が殺されるまでの事は無くても)、かならず、人笑へなることは(人の物笑いの種として蔑ろにされる事は)、ありぬべき身にこそあめれ(避けられない我が身の立場なのだろう)」など、 \*注に《漢高祖の戚夫人は、高祖に寵愛され、子の趙王を太子に立てようとしたが、高祖が崩御して後に、呂太后の子孝恵が即位すると、母子ともに囚えられ虐殺された(史記、呂后本紀)。『完訳』は「物語の状況や人間関係なども、この史実に類似」と注す。》とある。作者自身が筋立てのネタバラシをした、という事らしい。

世の疎ましく、過ぐしがたう(生きにくく)思さるれば(思われたので)、背きなむことを(出家する事を)思し取るに(決心されたが)、春宮、見たてまつらで(東宮に御会いしないままで)面変はりせむこと(姿を変えてしまう事は)、あはれに思さるれば(東宮に無用な心配を掛けると思えたので)、忍びやかにて参りたまへり(ごく地味な様子で東宮にお出掛けなさいました)。

大将の君は、さらぬことだに(ちょっとした御用でも)、思し寄らぬことなく(疎かに為されず)仕うまつりたまふを(中宮の御供を仕え申し為さるものを)、御心地悩ましきにことつけて(体の御不調を口実にして)、御送りにも参りたまはず(参内の御供もなさいません)。おほかたの御とぶらひは(一通りの護衛は部下に命じて)、同じやうなれど(いつも通りに為さいましたが、何と言っても源氏自身が姿を見せない事について)、

「むげに(大将はよほど)、思し屈しにける(気落ちして御出でらしい)」と、心知るどちは(事情を知る同士の王命婦と乳母子の弁は)、いとほしがりきこゆ(とても気懸かりになって話し合っていました)。

宮は、いみじううつくしうおとなびたまひて(東宮はとても可愛らしく御成長あそばされて)、めづらしううれしと思して(母宮との久々の対面を嬉しくお思いに為って)、むつれきこえたまふを(懐き申しなさるのを)、かなしと見たてまつりたまふにも(中宮はしみじみ愛しく思い申しなされば)、思し立つ筋はいとかたけれど(出家の決意も辛かったが)、内裏わたりを見たまふにつけても(御所内の様子を見渡せば)、世のありさま(大後の権勢に世は靡いていて)、あはれにはかなく(院の御遺志も空しく)、移り変はることのみ多かり(移り変わりばかりが目につきました)。

大後の御心も(みこころも、中宮への排他心も)いとわづらはしくて(はっきりと感じられて)、かく出で入りたまふにも(こうして御所に入出入りなさることさえ)、はしたなく(気が引けるほどで)、事に触れて苦しければ(事在る毎に気詰まりなので)、宮の御ためにも危ふくゆゆしう(自分が中宮の地位に留まる事は東宮の地位を危うくしかねないと)、よろづにつけて思ほし乱れて(考え合わせては悩みを深くされて)、

「御覽ぜで(御会いしないまま)、久しからむほどに(暫くして)、容貌の異ざまにて(私の見た目が普通と違って)うたてげに變はりてはべらば(変な風になったとしたら)、いかが思さるべき(お嫌でしょうか)」と聞こえたまへば(と中宮が東宮にお尋ねになると)、御顔うちまもりたまひて(東宮は中宮のお顔をじっと覗き込まれて)、

「\*式部がやうにや(式部のようなの)。いかでか(何でそんなこと)、さはなりたまはむ(そんな風になるはず無いのに)」と、笑みてのたまふ(笑って仰います)。いふかひなくあはれにて(中宮は出家を理解できない東宮の幼さが不憫で)、 \*「式部」は東宮付きの老女だろうか。暫く会わない間に顔が変わるという事を、東宮は中宮が老けて顔が変わる事と思った、という事らしい。東宮はこの年で6歳。中宮は29歳。源氏は24歳。

「それは(式部は)、老いてはべれば醜きぞ(歳老いているから醜いのです)。さはあらで(そうではなくて)、髪はそれよりも短くて、黒き衣などを着て、夜居の僧(よゐのそう、病氣平癒などの為に夜通しで加持祈祷する僧)のやうになりはべらむとすれば(の様に成ってしまうとすれば)、見たてまつらむことも(御会い出来ない事も)、いとど久しかるべきぞ(ますます長くなるのです)」とて泣きたまへば、まめだちて(東宮も真顔に成られて)、

「久しうおはせぬは(永くお見えに成らなければ)、恋しきものを(御会いしたくなります)」とて、涙の落つれば(涙が落ちてしまったので)、恥づかしと思して(恥づかしくお思いになって)、さすがに背きたまへる(さすがに顔を背け為さったが)、御髪はゆらゆらときよらにて、まみのなつかしげに(目元が親しみを込めて)匂ひたまへるさま(瑞々しく映える姿は)、おとなびたまふままに(成長なさるほどに)、ただかの御顔を(ちょうど源氏の顔かたちを)脱ぎすべたまへり(滑り被った生き写しでした)。

御齒(おんは)のすこし朽ちて(が少し虫歯で)、口の内黒みて(口の中が黒ずんで)、笑みたまへる薫り(お笑いになる瑞々しさの)うつくしきは(輝きは)、\*女にて見たてまつらまほしうきよらなり(女の顔として見たいほどの美しさでした)。 \*是は<お齒黒が可愛い>という美意識なのだろうか。私には理解できない表現だが。

「いと(本当に)、かうしもおぼえたまへるこそ(東宮がこれ程まで源氏に似ている事こそが)、心憂けれ(心配でならない)」と、玉の瑕に思さるるも(中宮が難癖に思えて成らないのは)、世のわづらはしさの(世の口性無しが不倫を言い立てかねない事を)、空恐ろしうおぼえたまふなりけり(空恐ろしく御思いに成るからなのでした)。